

マスタープランの3本の柱

キャンパスグランドデザインプロジェクトはキャンパスマスタープランの策定と、広義でそれを成り立たせる多様な活動を包括総称するプロジェクトです。従来のマスタープランは施設・環境の整備計画の提示でしたが、現代において求められるマスタープランは計画・立案、達成手段としてプロジェクトの実施、施設マネジメント提言と適切な運用を検証する、といった「PDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクル」の実行が要求されてきています。本プロジェクトでは以下の3本立てで活動を構成し、本マスタープランを策定しています。

1|上野キャンパスがめざすべき空間の計画——マスタープランの整備方針

上野キャンパスのハード面での整備方針の検討をし、策定する。

施設整備・空間軸・オープンスペース計画	<ul style="list-style-type: none">開かれたエリアから専門性の高いエリアまでの3つのゾーンの設定ゾーンごとの役割の強化と交流やネットワークの促進ヒューマンスケールの景観の継承と発展、歴史や周辺環境への配慮ファンリティマネジメントとの連動による持続可能性の追求
環境計画	<ul style="list-style-type: none">五感を呼び覚まし豊かな心を育む外部環境の整備自然遺産や生態系の継承とともに、新たな持続可能な自然環境の創造
交通計画	<ul style="list-style-type: none">学内交通における歩車共存の整備都市計画道路補92号における歩車共存の整備と上野キャンパスの一体化
防犯	<ul style="list-style-type: none">現状把握、セキュリティシステムの考え方の検討
防災計画	<ul style="list-style-type: none">現状把握、他地域の防災マスタープランとの連動、地域連携と学内の整備の検討
社会連携・地域連携	<ul style="list-style-type: none">上野地区、さらに広域エリアとの連携による芸術文化都市の構想

2|ファシリティマネジメント——マスタープラン運用のための枠組

マスタープランの運用のため、戦略的なファシリティマネジメントを計画する。

施設の有効利用	<ul style="list-style-type: none">戦略的施設更新プログラムの作成と有効活用の推進実踏調査による現況の精査と、それに基づくプログラムの提案
持続可能性の追求	<ul style="list-style-type: none">スペースマネジメント、エネルギーマネジメント、財源との連動
情報の共有	<ul style="list-style-type: none">データ整備、データ共有のためのインフラ整備および有効利用のアナウンスパイロットプロジェクトにおけるデータの有効活用
財源メニュー	<ul style="list-style-type: none">財源メニューに対する共通理解の構築と、多様な資金調達の実践施設整備から備品や運営費にわたる総合的なマネジメントの構築
人材育成	<ul style="list-style-type: none">ファシリティマネジメントを運用していく人材の育成と、PDCAサイクルの実践

3|パイロットプロジェクト——マスタープラン達成のための短・中期の行動計画

マスタープランの短・中期における実現達成手段として、いくつかのプロジェクトを立ち上げ、パイロットプロジェクトとして整備の実現に向けて活動する。今回は以下の3つのパイロットプロジェクトを提案する。

IPAARS=International Performing Arts Advanced Research Square [2011-2013]	<ul style="list-style-type: none">定評ある第6ホールの響きを継承しつつ、世界トップレベルの演奏芸術の研鑽と発表の場を再創出
---	--

Crossing 構想 2013-	<ul style="list-style-type: none">総合芸術大学としての図書館・アーカイブ機能を中心とした新たな藝大の顔の創出
---------------------	---

補92号プロジェクト 2013-	<ul style="list-style-type: none">補92号で分断されたA・B両地区の一体化と、社会連携・地域連携の創出
--------------------	--



GEIDAI UENO CAMPUS MASTER PLAN 2013

update_2016 / digest version

東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン [アップデート2016] 概要版

発行日	2016年3月31日 初版
企画・編集	東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室 東京藝術大学キャンパスグランドデザインマネジメントプロジェクト〔WG〕 東京藝術大学施設課
発行	国立大学法人 東京藝術大学
デザイン	秋山伸 / edicion.nord

GEIDAI UENO CAMPUS MASTER PLAN 2013

update_2016 / 概要版

GEIDAI UENO CAMPUS MASTER PLAN 2013

update
2016

本パンフレットは「東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン 2013」本編の内容を要約し、本編発行後2015年度末現在までの変化を反映したものです。

2004年に国立大学法人となった東京藝術大学は、国立大学法人法に基づく中期目標・中期計画と並んで、2007年より「東京藝術大学アクションプラン——世に『ときめき』を——〈豊かな感性、光る大学〉」を掲げ、世界最高水準の総合的な芸術教育・研究の推進、地域から世界までを視野に入れたネットワーク構築など、具体的な目標を掲げながら実践に努めています。

このアクションプラン実現のための重要な鍵となるキャンパス空間の整備や、そのマネジメントを長期的展望に立って策定するべく、2010年に学長主導のもと、まずは本学のメインキャンパスである上野キャンパスについての将来像を描くことからキャンパスグランドデザインプロジェクトを開始しました。上野はサテライトキャンパスである取手・千住・横浜の各キャンパスを結ぶセンターの役割を果たしており、各分野・領域を縦横に往還する高度な動きを可能にし、学内外においてフレキシブルな対応のできることを求められています。本マスタープランでは、芸術における「総合的な力が発揮できる」キャンパス空間として、高度な教育研究環境の確保と広く社会に開かれたキャンパスの姿をめざします。



上野キャンパス全景
[2006年6月撮影]
上野公園および
周辺地域と連続する
豊かな緑をのキャンパス

上野キャンパス整備のめざすもの

本学のアクションプランに基づき、長期的視点に立った教育研究環境の整備の方向性を以下に示します。

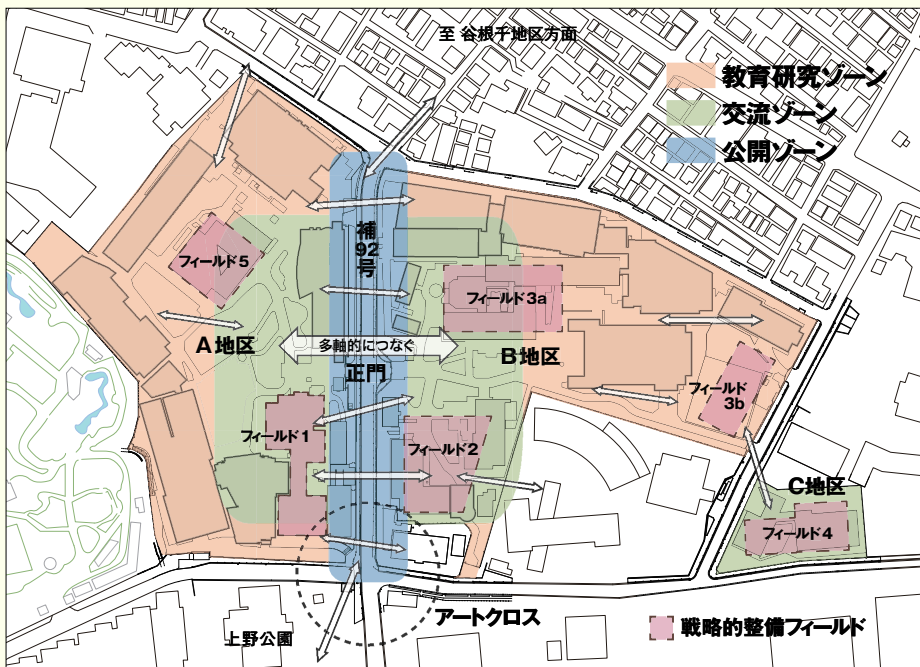
- 世界最高水準の総合芸術研究拠点としてのキャンパス
- 創造性を引きだし、豊かな人間性を育むキャンパス
- 総合芸術大学の力を最大限に発揮するために、学内交流を促進するキャンパス
- 個別研究から社会への発信や交流まで、秩序ある空間のなかで高度な力を発揮できるキャンパス
- 新しい時代にフレキシブルな対応ができるキャンパス
- 日本の芸術文化の発信拠点となり、広く社会連帯や社会貢献ができるキャンパス
- 国内外のさまざまな分野や機関との交流に対応できるキャンパス
- 上野公園地区を芸術都市として発展させていく拠点としてのキャンパス
- 大学の持続可能性を高める、総合的な施設整備運用マネジメントを伴ったキャンパス

1 | 上野キャンパスのめざすべき空間の計画

上野キャンパス全体のなかで各施設整備の内容を検討する時に、どんな空間プログラムにしていけばよいか、空間の特質、外部空間とのつなげ方、交通や防災上はどう対処するかなどを戦略的に考えたグランドデザインを示します。

3つのゾーンと戦略的整備フィールドの設定による空間秩序の創出

上野キャンパスは道路によりA,B,C 3つの地区に分断されています。限られた敷地に建て詰まりの施設の中で分散した機能をまとめ一体感のある高度利用キャンパスを目指します。本マスタープランでは中央部での開放的な空間の広がり確保と、そこを交流空間としてその奥に個別の教育現場が見え隠れするという、ゆるやかな構造として、教育研究・交流・公開の3つのゾーンを設定し、奥行きのある豊かなキャンパス空間の獲得を目指すとともに、機能強化の必要な施設を含んだ戦略的整備フィールドを設定。既存施設と合わせ、それらに多軸的なつながりを重ねることでキャンパスに空間秩序をもたらす計画です。



多軸的につなぐ

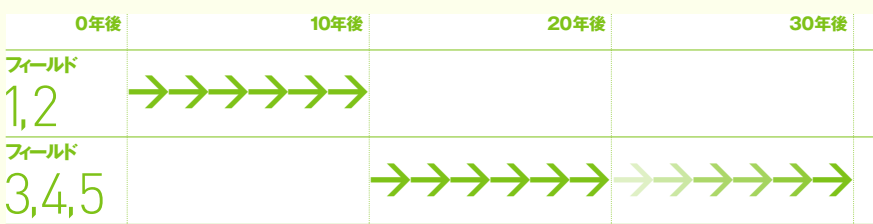
学内および社会に対して「多発的にいろいろな交流を誘発するような空間づくり」をめざします。さらにそのつながりが周辺へも続いています。

アートクロス「芸術の交差点」

上野公園の北西端部にあたり、芸術文化を強く感じることのできる交差点に対して開くことで新たな人の流れを引き込み社会に開かれた大学の実現をめざします。周辺地域との人の往来が今後盛んになると予想される要所であり地域にとっても非常に重要な場所です。

戦略的整備フィールドの設定

高度利用・機能強化の場として複数のフィールドを設定します。設定されたそれぞれのフィールドでは、建物の更新に併せて外部空間や交流機能を同時に整備することで、教育研究・交流・公開の3つのゾーンを徐々につくり上げていきます。



フィールド1 | A地区 | 附属図書館+田芸術資料館一帯
[Crossing構想 Stage 1] パイロットプロジェクト
附属図書館の耐震改修・機能強化にもない、芸術における知の拠点として、また開かれた大学の姿として上野公園へむけての盛大の新しい顔づくりははじまりました。

フィールド2 | B地区 | 大学会館+管理棟一帯
[Crossing構想 Stage 2]

周辺機関とも隣接する好立地を高度化し、研究機能、大学運営の中核となる機能の内包と学生福利の向上、さらにサテライトキャンパスとの連携機能などの充実もはかりながら、新しい軸線で結ばれるStage 1とともに芸術における知の拠点として社会や地域と積極的に連携し貢献していきます。アートアンドサイエンスラボ棟が先行して整備され、産学官連携の拠点としての稼働がはじまっています。

フィールド3 | B地区 | 音楽教育研究棟群の機能強化
集中と解放の必要な教育現場において効率的な交流空間の配置と、実習空間の充実により第一線の教育現場の質を確保し、時代にもフレキシブルに対応できる環境の基盤を強化します。

フィールド4 | C地区 | 新しい・盛大の可能性を追求
独立した敷地を活かして外部からの高いアクセシビリティと自由なオペレーション(24時間稼働など)の可能性を背景に新たな大学戦略の基盤として活用していきます。

フィールド5 | A地区 | 中央棟とその周囲
研究機能の高度な集束と交流空間の充実をはかります。武蔵野の森の姿を預す保存林とともに緑豊かな自然に囲まれた良好な教育環境の構築をめざします。

空間整備の方針

ヒューマンスケールの豊かな空間

上野キャンパスの特徴は、ヒューマンスケールの空間の連続による、生き生きとして親しみのある場がつられていることです。これは芸術の奥深さや多様性とも相まっています。今後もこれを引き継ぎ、ネットワークを強化する整備をしていきます。

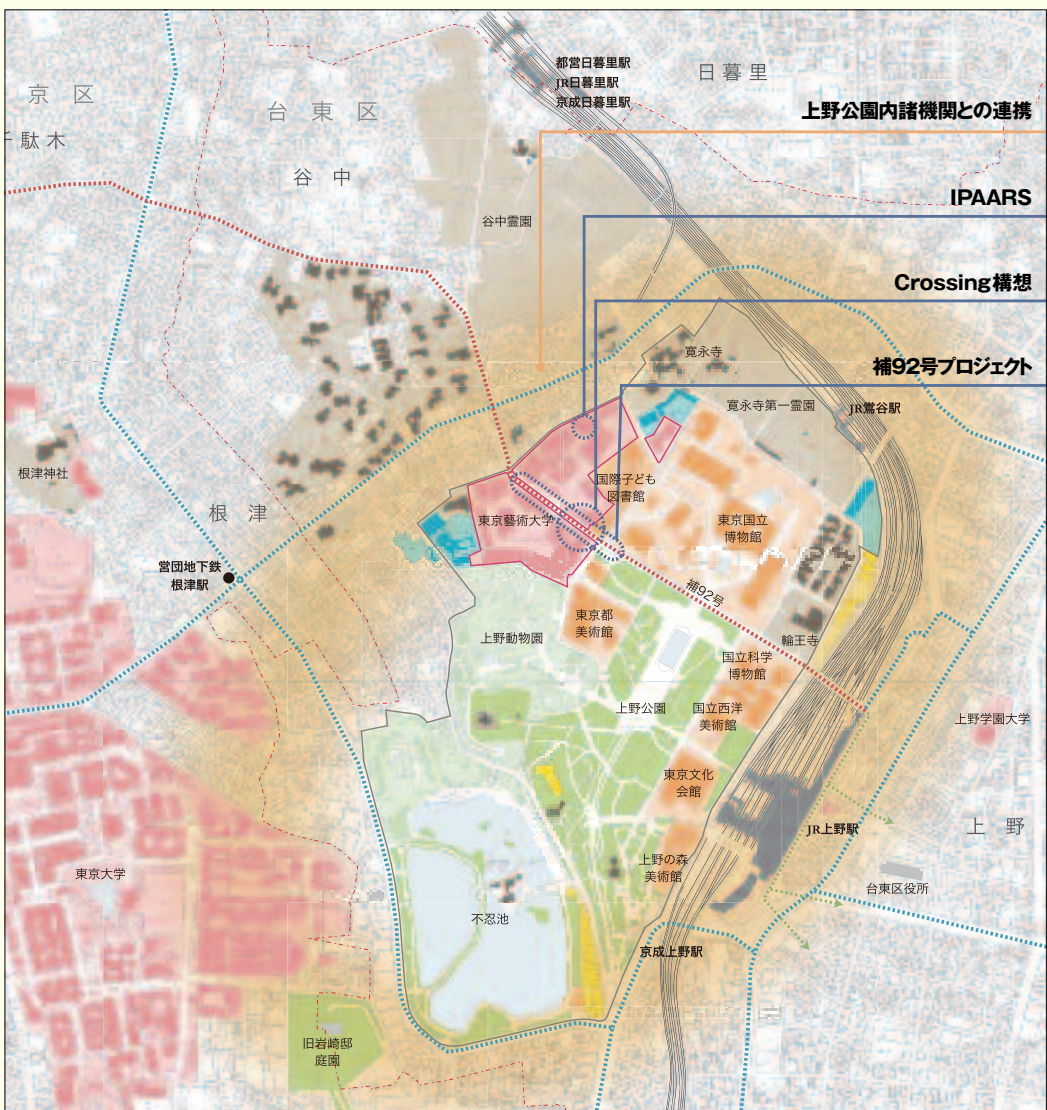
芸術活動をサポートする四季が感じられる環境づくり

関東の在来種を中心とした植生で整備し、四季が感じられ感性が磨かれるキャンパスをめざします。キャンパスの中の日向や、全部で2.7haある屋上などを積極的に有効活用するよう整備し、地域の生態系への貢献をすすめます。

歩車共存による学内交通の整理

キャンパスは人々が歩き廻る場であることを再確認し、車はルールに則って使用できる、歩車共存を基本とします。交通実験によるルールの周知からはじめ、施設整備とともにその周辺外部空間を整備していきます。

参考：四季の変化が感じられる平林寺境内



上野の杜の現況
[2012]
年間有料来場者数: 1,100万人
総延床面積: 18.4万㎡
上野公園面積: 約80万㎡
[各施設敷地面積を含む]
収蔵品数: 約400万点

芸術文化施設: 博物館/美術館/劇場/コンサートホール等
教育施設
寺社・墓地など
民間施設ほか
公園・緑地
動物園
鉄道施設
大学
融合系街路
自動車幹線街路
パイロットプロジェクト

0 50 100 250 m

社会連携・地域連携

東京藝術大学上野キャンパスは上野恩賜公園の北西の一角にあります。上野公園一帯には明治期以降、国・都・民間の文化施設が集まり、「上野の杜」といえる一大文化ゾーンを形成しています。ここには都心有数のまとまった豊かな自然環境もあり、四季を通じて多くの人々が訪れる良好な環境にあります。また、上野駅という基幹駅に隣接し、成田空港とも直結した日本の玄関口となっていることから国際的にも日本の文化を発信する高いポテンシャルを持っています。

2020年に開催されるオリンピック・パラリンピック東京大会を契機にこの文化ゾーンを更に発展させるべく「上野「文化の杜」新構想」が文化庁長官、東京藝術大学長の呼びかけにより2013年末に立ち上がりました。文化施設同士の連携を図りながら芸術文化の振興に貢献し、グローバルな文化戦略拠点として一層の役割が期待されます。

東京藝術大学では本学と空間的につながるこの上野公園一帯を「芸術文化都市」として都市的な視点から見つめ、地域全体を構想することからマスタープランを強化していきます。本マスタープランにおけるパイロットプロジェクトも上野の杜との一体的な連携と、そこへつながる谷根千地区に代表される歴史的な文化エリアとの地域連携につながる計画とし、地域全体の活性化に貢献していきます。

2 | ファシリティマネジメント[FM]

2004年の国立大学法人化以降、社会からの責任を果たし、持続性のある大学経営をおこなうツールの一つとして施設整備、維持管理、運営をハードとソフトの両面から見直し、持続性の高い効率的な取組みを進めていきます。

施設の有効利用

——ハード面の質を向上させるFM

教育研究の基盤である施設の質の維持と機能向上は非常に重要な視点として捉えています。空間そのものが学生の感性に直接結びつく本学では、特に丁寧な調査とだれもが理解できる情報整理を元に、一元化されたデータベースの構築が急務です。実測調査の結果、残余空間がほぼ無い本学の状況が明らかになっており、新たな研究活動のための更なる効率的な利用を進めるため一貫性のある戦略的な施設利用計画を立て、施設の更新と維持をおこなっていく必要があります。

持続可能性向上の追求

——ソフト面の実効性を高めるFM

弾力的運用可能な共同利用スペースの戦略[スペースマネジメント]、効率的なエネルギー管理の戦略[エネルギーマネジメント]、これらを財源と連動させる維持管理の戦略[コスト・クオリティマネジメント]の確立が急がれます。そのためには施設利用に対しての学内の意識改革が必要であり、またライフコスト管理[LCM]の概念を導入することで、流動的に変化する利用に対応させられる柔軟性を持たせるなどの持続可能性向上への提案を進めます。

ファシリティマネジメントと連動するPDCAサイクル



3 | パイロットプロジェクト

IPAARS

国際演奏芸術高度研究スクエア

International Performing Arts Advanced Research Square
[2014年3月完成]

国際的な専門教育研究の交流拠点として、300人規模の第6ホールを中心に、公開レッスン室、各種センター機能が集まり、研究室、練習室が直結した総合的な威力を発揮する東京藝術大学音楽学部の心臓部の整備です。学位審査演奏会も行われる第6ホールの定評ある響きは、より豊かに引き継がれます。

| 右写真: 改修により再整備された第6ホール

マスタープランにおける短・中期整備目標の達成手段としての施設整備計画です。各プロジェクトは、ファシリティマネジメントのもと持続可能な計画をし、本学の未来を一つ一つ築いていきます。これらは施設整備であると同時に大学全体のハード面での問題を創造的に解決していくツールでもあります。



Crossing構想 stage 1

IRCA 国際芸術リソースセンター

International Resource Center of the Arts

Crossing構想は「芸術における知の拠点」整備を軸に芸術の発信基地、交流基地としてさまざまなレベルの「結節点・交差点」を配し、学内交流・社会交流を展開するものです。その第一弾としてフィールド1において図書館を中心とした本学の基幹機能の充実と、開学から所有する多くの貴重な芸術資料に触れられる環境構築により芸術創造につなげるプロジェクトです。積極的に社会へも公開し、「開かれた大学」をめざします。| 右写真: 上空から見た上野の山



補92号プロジェクト

道路拡幅整備を契機とした大学施設整備です。公開ゾーンに設定されたこのエリアは、歴史的広がり総合芸術の深みを体現する本学の教育研究活動のコンテンツが、補92号に沿い地域に向かい展開していきます。このためには上野キャンパスを南北に分断している補92号を、歩車共存型の道路としていくことが欠かせません。歩きやすい公園整備に貢献し、谷中地域へのアクセスを補強し、周辺地域とのダイナミックな連携へも貢献していきます。| 右図: 補92号整備イメージ

